現地レポート／浅井　博明（複合科学研究科、極域科学専攻）

派遣先：アメリカ合衆国

派遣先機関名：International Arctic Research Center University of Alaska Fairbanks

派遣期間：2016 年 1 月 23 日～2016 年 2 月 28 日

2016 年 2 月 25 日

授業・研究の進捗状況（授業の登録の有無：　　無）

指導して頂いている先生の元には中国、インド、ロシアの学生・ポスドクが在籍しており、数値モデルを用いた研究が盛んです。所属機関は International Arctic Reserch Center（国際北極圏研究センター）という名称ですが、研究範囲は極域だけにとどまらずにアジア・インドモンスーンや熱帯の低気圧活動にまで及びます。研究室は二人部屋で、とても広い机やディスプレイを与えて頂き、快適に研究を行っています。　現地で実際に指導教官と議論を重ねる内に（週２回ほど）、自分の研究の改善点が明確になりました。特に指導教官は数値モデルのことに精通されているので、自分の使っている数値モデルについて的確なアドバイスを頂いています。研究に関する議論をしていて気付いた点として、日本の研究者はまず不備な部分に着目しますが、海外の研究者は良いところを注目してくれます。一回の議論でとてもモチベーションが上がるので嬉しいのですが、何か、自分がすごく成長したような気になって注意が必要だと感じました。なにせ、英語で議論すること自体妙にテンションが上がることですから。

生活関連状況

フェアバンクスはアラスカ州で２番目に大きい都市ですが人口は 3 万人程度で、道を歩くときに人混みを気にして歩く必要はまずありません。人が少ない分、町の人たちはみんな知り合いのように仲が良いです。アメリカは治安が悪い印象がありますが、フェアバンクスの人たちは皆親切でとても居心地が良かったです。　しかし、東京で暮らしている私としては利便性に大きな差を感じました。車がないと買い物へも大学へもどこにもいけません。本数が限られますが、貴重な市内バスを使って移動しています。 例年の２月の気温は-40℃を超える日が続きますが、今年は異常に暖かく、-25℃程度に落ち着いています。　滞在中に食べた 200g を超えるステーキ、生クリームいっぱいのスモークサーモンパスタなどとても美味しかったですが、アメリカンフードは好みがあると思います。健康に良いとは言えません。いかに好きだとしても１ヶ月を超える滞在だとどうしても飽きます。またアラスカは基本的に物価が高く、外食すると平気で 2000 円を超えてしまい財布にも優しくありません。滞在して 10 日くらいで、米や味噌汁などの日本食が自然と恋しくなってきました。　僕の宿泊先の目の前には大型スーパーが２つもあり(Safe Way, Fred Meyer)、そこにはアジアの食材や調味料が日本並みに揃っているので、毎日のように帰りに立ち寄っています。ホテルにはキッチンがないので電子レンジを使って調理をしています。米を炊いたり、温野菜や蒸し鶏を作ったりと日本で食べているものと変わりません。外に出て運動できない分、食事で体調管理のバランスをとって生活しています。